



愛川ふれあいの村 今月の風景

2020年9月 自然のたより

9月も中旬を過ぎると、涼しく秋の気配が漂ってきます。すると夏とは違った生き物がやってきます。よく目につくのがトンボです。一般に赤とんぼと呼ばれるアカネトンボが数種類と、たった1日だけ姿を現した珍客ルリボシヤンマなどさまざまな種類を見ることができました。数年ぶりに確認できたのが、神奈川県では珍しい亜熱帯性のキノコ“カキノミタケ”です。また、渡り前のサシバが村を通過しました。一番驚いたのが、めったに会えないシロマダラでした。花も秋を感じさせてくれるものが多く、カラフルに村を彩ります。(石川)



シロマダラ



サシバ



シモバシラ



ルリモンハナバチ



ルリボシヤンマ



ヒガンバナ



カラスノゴマ



マユタテアカネ



ミヤマアカネ



ナツアカネ



アキアカネ



ツリガネニンジン



カシワバハグマ



キアゲハ



カラスウリ

トピックス ★仁義なき戦い★

愛川ふれあいの村で見かける可愛い小動物…ニホンリス。シイの実やクルミなど、彼らのえさとなる木の実が村内にたくさんあります。野外炊事場の屋根の上を走っている姿を時々見かけます。

そんなリス、鎌倉の我が家にも山伝いにやってきます。正体はその昔、江の島の植物園から逃亡したといわれる『タイワンリス』です。日本固有種のニホンリスに比べ、ひと回り大きく、耳が丸く、顔つきは獰猛そうです。遠目では可愛らしく見えますが、農作物に被害を及ぼしたり、鳥の巣を襲い卵を食べたり、電線をかじったりなど迷惑千万です。鎌倉市内だけでも、1万匹は生息しているといわれています。「可愛い」とばかり言われてられないのが現状です。今年も柑橘系『ハルカ』を狙って、早くも家の周りを走り回っています。さて、どうしたものか…今年市役所をお願いをし、捕獲のため罠を借用しました。ヒアリやワニガメと同様、特定外来種に指定されているタイワンリス。リスに罪はないですが、人間の生活はもちろん、生態系にも悪影響を及ぼしています。今後さらに生息範囲を広げれば、やがて村のニホンリスも棲みかを追われるかもしれません。まずは、人間との「仁義なき戦い」です。
(高梨)



生き物 ★秋の夜長を鳴き通す★

最近、村内の草むらを歩くたびに、ぴょんぴょん跳ねるコオロギたちがいる。

コオロギといえば、童謡の「むしのこえ」を思い出す。コオロギの鳴く時期は7月下旬から11月まで。暑い日には、気温が下がる時間帯によく鳴く。

涼しくなり始め、ようやく秋がやってきた。村を歩けば、虫の合唱が聞こえる。「コロコロ」とエンマコオロギ。「リーリー」とアオマツムシ。「スィーッチョン」とハヤシノウマオイ。今までは合唱を聞くだけだった虫の声。調べてその姿をよく見て、声を知る。それから再び外に出ることで、1匹1匹の鳴き声を聴くことができる。まだ暑い時期に村を訪れた子どもたちは、跳ねるコオロギに大興奮だったが、今度は虫の声にも耳を傾けてもらいたい。(三好)



旬 ★スベリヒユ (滑り苺) ★

8~9月頃、畑に我がもの顔にはびこる雑草がある。スベリヒユだ。戦後食糧難の時代子どもだった私たち兄弟に、母親がこれを酢味噌あえにして食べさせてくれた。赤くて丸い茎を肉厚の葉ごと食べる。とろみがありコリコリとした食感だった。私は長年、食べ物不足を補うために雑草まで食べていたのだと思い込んでいた。

ところが先日、「山形県では今でもヒョウという名で、辛し和えにしてよく食べている」とテレビ番組で紹介していた。これは、江戸時代の名君・上杉鷹山公が推奨されたのだという。もとをたただせばやはり、非常時に備えた食べ物だったのだろう。(河野)



カキノミタケ発生 来月の見どころ
今年の夏は、気温三十℃以上の真夏日、気温二十五℃以上の猛暑日が続き熱中症に注意しなければならぬ日が多かった。台風の影響による大雨もあり各地で被害が発生した。
ふれあいの村では、新型コロナウイルス感染症拡大防止の影響で休村日が続きシカやイノシシなど野生動物が昼間でも現れ柔らかいツリフネソウやヤマユリの球根が食べられてしまった。九月から開所することが出来てシカやイノシシはあまり見かけなくなった。
しかし、キノコ類は食べられることもなくあちらこちらでよく発生し、アカマツの傍にはアメリカイグチ、積もった落ち葉から美しいハナオチバタケやカラムシタケが見られた。
三年前、台風や長雨で気温が上昇し大発生した亜熱帯性のカキノミタケ(マユハキタキ科)は、今年の夏の暑さでいつもよりも早く発生していた。
カキノミタケは、地面に落ちたカキノ種子から数本〜十数本が発生する。カキノ種子が茶色でカキノミタケは黄色なのでよく目立つ。形は角状で数ミリ〜二センチほどの大きさである。今年のカキノミタケは、一粒のカキノ種から出ていたり、カキノ「へた」にまともたまま付いているカキノ種子から数十本発生しているものもあった。あまり見かけることのできないカキノミタケを是非観察してほしい。(吉田)

